

大分県中津出身実業家和田豊治の東京向島自邸、現駿河小山・豊門会館の調査研究

正会員○山田由香里*¹ 同 西 和夫*²

9. 建築歴史・意匠－1. 日本建築史

中津出身実業家和田豊治，富士紡績，駿河小山，豊門会館，向島，

はじめに

大分県中津出身の和田豊治（わたとよじ 文久元年・1861～大正13年・1924）は、明治大正時代に活躍した実業家で、わが国の近代紡績業に多大な功績を残し、特に明治34年（1901）から工場長と社長を務めた富士紡績株式会社においては、経営を改善し、会社を大きく成長させた人物として知られる¹⁾。富士紡績は、明治29年、富士山の豊富な水源を有する駿河小山（静岡県駿東郡小山町）に設立された。経営の安定した大正14年には、豊治の遺志にもとづき、従業員と地元住民の厚生施設として豊門会館が建設された²⁾（図1）。

従来、豊門会館は東京向島にあった豊治の自邸を移築したものと指摘されていたが、その様相や歴史的背景は概略の説明に留まっていた³⁾。2004年、小山町から、豊門会館一帯の都市公園整備計画策定にあたって依頼を受け⁴⁾、建物調査を行った⁵⁾結果、豊門会館の建築の様相、歴史的背景、向島時代の様子が明らかになった。判明した点を以下に報告するとともに、向島の敷地跡、豊治出身地中津の生誕地や墓所の調査も行ったので、合わせて報告する。

1. 小山町と富士紡績、そして和田豊治

小山町は、静岡県の北東端に、神奈川県と山梨県に県境を接して位置し、富士山の山頂までを町域に含む。小山町の近代化の歩みは、富士紡績の歩みと一致し、概観は以下ようになる⁶⁾。

明治26年、富士山に水源を發する鮎沢川と須川の合流する一帯の豊富な水源に着目し、工場敷地の土地買収を開始。28年、富士紡績株式会社発起を森村市左衛門（1839～1919）や富田鉄之助（1835～1916）らの連名で農商務大臣に出願、29年に認可を受け会社設立、30年に工場建築起工式挙行、31年に運転開始。しかし、経営は順調ではなく、創業間もなく、経営建て直しの

必要に迫られた。その期待を受けたのが、日比谷平左衛門（～1921）と和田豊治である。明治34年に豊治が工場長に就任すると経営改善が進み、38年からは事業拡大が行われ、小山工場の施設充実だけでなく、東京・愛知・和歌山・香川・愛媛・大分などの各地に新工場が建設された。大正12年の関東大震災で小山工場は被害を受けたものの、速やかに復興が進められ、14年には豊門会館が建設された。

『財団法人豊門会館ノ概要』⁷⁾によると、豊門会館は、豊治ら先覚者たちの遺志に沿い、地域の教育・娯楽・保健・修養の施設として財団法人を組織し、施設を作ったもので、その名称は小山町の発展に欠くことのできない、和田豊治と森村市左衛門・浜口吉右衛門（初代監査役）・日比谷平左衛門の三門に因み名づけたという。大正12年5月に財団法人設立申請、内務大臣の許可を得て13年8月に登記、以後、和田家遺族から寄贈された向島の邸宅の移転工事と庭園の築造に着手し、14年12月に建物落成、15年5月16日には盛大な開館式が挙行された⁸⁾。よって、豊門会館は、東京向島の和田豊治自邸を移築し、大正14年に落成したものである。



図1 豊門会館西側外観 洋館と和館からなる

A study on the House of WADA Toyoji (born in Nakatsu Ohita) in Mukoujima Tokyo before, now states in Surugaoyama Shizuoka as Houmon-kaikan

YAMADA Yukari, NISHI Kazuo

2. 豊門会館の建築的様相

豊門会館は、高台にある公園の敷地東側に、西面して立地する。敷地西側の正門からの車道が、玄関前で車寄せとなってアプローチする。建物は木造で、洋館と和館からなり、洋館は平屋建てスレート葺き寄棟造り、和館は2階建て瓦葺き入母屋造りである(図2)。和館に設けられた玄関は、入母屋破風をもち、玄関扉は唐戸、土間部分と8畳からなる⁹⁾。8畳正面の額は、「豊門会館、昭和辛未七月、九十二翁青洲」とあり、青洲すなわち澁澤榮一(1840~1931)によって昭和6年に書かれたものである。玄関から南側に応接間、洋館の玄関、2室続きの客室が続く。

洋館の主室である客室は大壁構造、床は寄木作り、壁はクロス貼りで周囲を丸紐で押さえ、天井は漆喰塗りでモーディングの装飾を施す(図3左)。北側に大理石のマントルピース、東側にサンルーム、南側に出窓を配し、窓は上げ下げ窓で、内側にカーテンを下げる。出窓以外の窓には外側に鎧戸がつく。建具は重厚な彫刻が施され、家具や照明器具とともに室内意匠を特徴づける。

和館の1階は、玄関から畳廊下をはさんで西側の、座敷十畳、座敷八畳、八畳の3室と、北側の細長い平

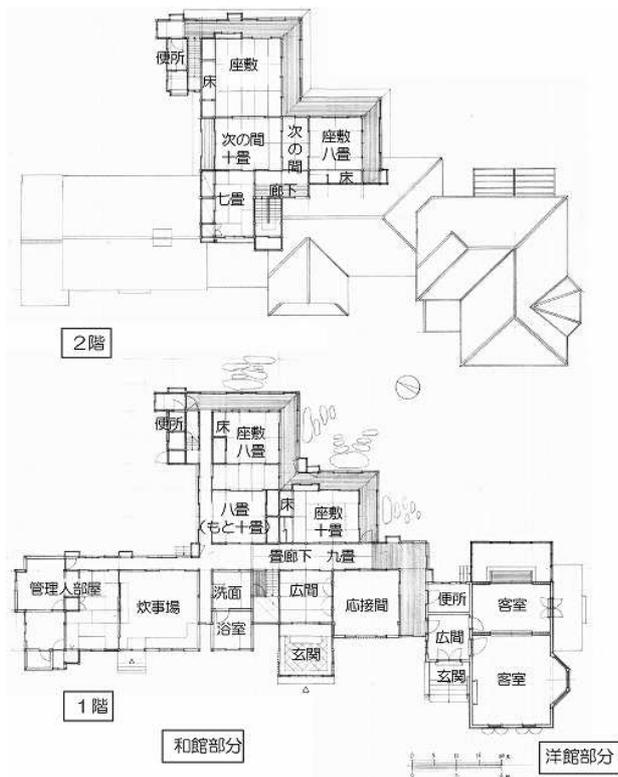


図2 豊門会館平面図

屋建てのサービス部分からなる。座敷十畳は床・違棚・付書院、座敷八畳は床と掘りごたつを備え、八畳はもとは押入がなく、十畳だった。周囲には幅4尺の板縁を巡らす。サービス部分は風呂・台所・管理人室が並ぶ。台所の屋根に煙出しが残り、以前は竈があった。

階段は、玄関北側と座敷八畳北側の2箇所にある。

2階は、座敷十五畳、次の間十畳、座敷八畳、次の間四畳、七畳半の5室で構成される。座敷十五畳は幅1間半の大床で、両脇に棚を置き、付書院を備える(図3右)。座敷八畳は、幅2間を一枚板で仕上げた大床を備え、天井は畳大の杉板を畳の敷き方と同様に張る。各部屋境には欄間を入れ、周囲に板縁を巡らせる。座敷十五畳と次の間十畳の2室は大空間を作り出し、南側板縁からの眺望と合わせ、開放感を味わえる。現在、園内に樹木が生い茂って見通せないが、以前はここから、鮎沢川の上流と下流にある小山工場全景を見渡せ、周囲の山並みとともに、富士紡績の厚生施設にふさわしい景色を眺めることができた。

基準寸法は、1間を6尺とする芯々設計である。洋館の天井高さは11尺6寸3分、和館の内法高さは5尺7寸、和館の天井高さは1階で9尺1寸8分、2階で9尺3寸2分である。

畳下の床板の釘が二度打ちされていること、一部の柱の納まりに若干の傷があることから、移築されたことが確認される。しかし、全体的には部材を解体したときの傷みはほとんど見られず、良好な状態が維持されている。瀟洒な洋館と正統的な書院造りの和館が破綻なく構成された見事な近代和風住宅建築で、吟味した材料が使われ、細部意匠まで優れている。部材の接合部に傷みがないことから、向島における関東大震災では、ほとんど被害を受けなかったと考えられる。洋館客室の漆喰天井は、大面積にもかかわらず割れがほとんどない。移築工事は、高い技術をもつ職人によって丁寧に行われたことが窺える。



図3 豊門会館 西洋館客室と和館2階座敷十五畳

大正15年の落成式、昭和11年に徳富蘇峰、昭和14年に李王垠が訪れた際の写真があり¹⁰⁾、現状と比較すると、外観内観ともに移築時の様相を良好に留めている。これら古写真の人物をはじめ、先述の澁澤榮一、また園内の「和田君遺徳碑」に名を連ねる桂湖村・喜多貞吉・朝倉文夫¹¹⁾など、当時の財政界の錚々たる人物の事跡が豊門会館に留められ、この建物の歴史的価値をさらに高めている。

3. 向島時代の様相

東京向島の和田豊治の自邸は、『偉人和田豊治翁』¹²⁾によると、その住所は本所区向島隅田川附近須崎町237番地で、明治42、3年頃、現在のものに改築されたとある。また『和田豊治伝』¹³⁾によると、もともとは成島筑後守の敷地で、成島柳北¹⁴⁾が住み、池沼に数百の海棠のあったことから海棠園と呼ばれ、淡紅の花雲が池水に映る風流な場所で、柳北の死後人手に渡って抵当に入っていたものを、明治25年頃三井銀行に入った豊治が購入し、同37年、小山工場が軌道にのると、海棠園の新宅の建築に取り掛かったとある。

後書には、「向島和田邸海棠園に於ける鷗會」と題する向島時代の写真が収録されており、サンルームがないなどの若干の差異はあるものの、現在の豊門会館を南側から見た外観と同一である(図4)。さらに前書は、自邸が地域に受けられている様子を紹介し、毎年2月の稲荷の祭礼のときは附近の子供たちを招いて園遊会を催し、また関東大震災では広い邸宅が大火を逃れた多くの人の避難所となり、迫る火を食い止めたという。



図4 上：向島時代の和田豊治自邸外観（「向島和田邸海棠園に於ける鷗會」『和田豊治伝』所収による）
下：豊門会館南側外観

以上のことから、豊治の自邸は、東京向島の海棠園と呼ばれた成島家の敷地を明治25年頃購入したもので、明治37年から43年頃までに建物が建設され、邸内は地域の憩いの場として親しまれ、関東大震災の被害もまぬがれた。古写真からは、現在の豊門会館が、外観や部屋の構成を大きく変えることなく、向島時代の様相を踏襲して移築されたことが窺える。

明治42年の地図「上野・日本橋」¹⁵⁾の須崎町部分を見ると、豊治の自邸は南北に長い長方形の敷地で、北側に鉤型の大きな建物があり、南側には池がある(図5左)。池の存在は、先の海棠園の記述を裏付ける。大正元年の地図「向島須崎町北部」¹⁶⁾の該当箇所には、「和田豊治」と書き込みがあり、西側の通りに面した北寄りに門らしき記号がある(図5中)。

2つの地図と古写真の内容から、向島時代の建物の向きを検討すると、西側の門に玄関を開き、南側の池の海棠を眺められるように座敷を配していたと推測され、現在の豊門会館と同じく、玄関を東面させ、南側に洋館を配して建っていたと考えられる。現在この敷地は、広さや区画はそのまま踏襲され、言問小学校の敷地となっている(図5右)。

4. 出身地中津の和田豊治生誕地や墓所

豊治は、大分県豊前国下毛郡中津町字鷹部屋街の生れである¹⁷⁾。現在の大分県中津市鷹部屋にあたり、中津城北西の武家屋敷地で、同郷の福沢諭吉(1835～1901)宅跡¹⁸⁾から200mほどの場所である。鷹部屋の北門通りに面する一画には、和田公園が作られている。石碑の年紀によると、昭和16年3月に整備されたもので、園内には昭和15年10月に建立された「和田豊治翁頌徳碑」がある(図6)。碑は、石張りで高さ5mあり、題字は杉溪六橋¹⁹⁾の書、裏面の碑文は枢密顧問官竹越

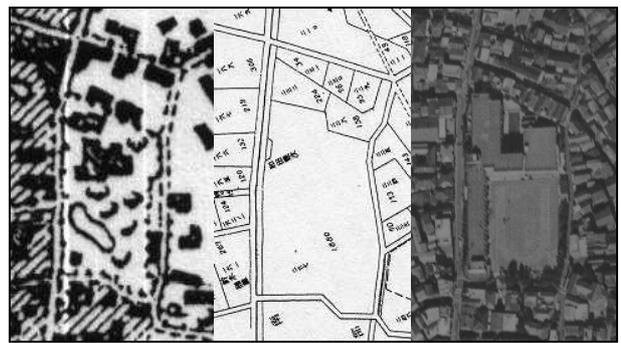


図5 東京向島の和田豊治自邸地図 北が上
左：明治42年 中：大正元年 右：現在の航空写真

與三郎²⁰⁾の撰文で、豊治の事績に触れ、中津に和田奨学資金を設立したことに敬意を評し、生誕地に碑を建て、公園を作ったと記されている。

17歳から21歳まで、豊治は医者を目指し、村上医家9代目村上田長(1839~1906)²¹⁾の書生となった。このとき過ごした建物が、現在村上医科史料館として公開されており(中津市諸町)、豊治の生活した屋根裏部屋が残っている²²⁾。

墓所は、中津市寺町の正寿山浄安寺にある。和田家墓所は、境内の墓所の一面をさらに門扉で囲い、参道も設けられている(図7)。3基の墓石のうち、中央は豊治が丹後宮津から先祖の墓を移したもの²³⁾で、明治37年に村上田長が寄せた撰文が記されている。左側が豊治と夫人の墓である。参道両脇の10基の灯籠には、「大正十五年三月、大日本紡績聯合會」とあり、豊治逝去後の大正15年に大日本紡績連合会が寄進したものである。ここにも、参道入口に「和田君恵碑」の石碑があり、大正15年3月に建立されたもので、澁澤榮一の撰文と篆額、杉溪六橋の書で、豊治が紡績事業に果たした事績が記されている。

このように、富士紡績などにおける豊治の業績は、出身地中津においても高く称えられている。



図6 和田公園



図7 浄安寺の和田家墓所

おわりに

以上、大分県中津出身の実業家和田豊治の東京向島の自邸で、現在駿河小山に所在する豊門会館についての調査結果を報告した。まとめると次のようになる。

①わが国の近代紡績業に功績を残した豊治の自邸で、明治37年から43年のあいだに東京向島に建設され、大正14年に富士紡績株式会社の厚生施設として駿河小山に移築された。②洋館と和館が破綻なく構成され、規模が大きく、細部意匠も優れ、吟味した材料が用いられており、質の高い近代和風住宅建築である。③向島において大正12年の関東大震災をくぐり抜け、駿河

小山への移築の際は向島時代の様相を忠実に踏襲し、明治43年当時の建物の状況を良好に伝えている。④豊門会館や和田豊治の事績を通じて、近代紡績業の政財界人の交流や、駿河小山・東京向島・大分中津のつながりを窺い知ることができる。

豊門会館は、小山町によって保存活用が進められる計画であり、今回の調査で明らかとなった建築的価値や歴史的背景が、今後、建物を正確に把握し、有効利用の一助となることを期待する²⁴⁾。調査に際し、小山町都市整備課にお世話になった。記して感謝したい。

【註】

- 1)『和田豊治伝』喜多貞吉編輯、和田豊治伝編集所、1926。2)『富士紡績百年史』上巻、富士紡績株式会社社史編集委員会、富士紡績株式会社、平成9年。3)『静岡県の近代和風建築』静岡県近代和風建築総合調査報告書、静岡県教育委員会文化課編、静岡県教育委員会、2002。4)建物、2004年8月、富士紡績から小山町に寄贈された。調査は、財団法人都市計画協会の「まちづくり専門家派遣」制度を通じて、小山町都市整備課から山田が依頼を受けた。本論の一部は、『静岡県駿東郡小山町 富士紡績関連施設—豊門会館(旧和田豊治家住宅)・豊門青年学校・六合山荘・森村橋など—建造物調査報告書』(2004年10月)で報告した。5)調査は、2004年9月に実施し、西・山田のほか、小笠原徳明(神奈川大学日本常民文化研究所委託研究員、株式会社小笠原建設1級建築士設計室)、吉池美奈(神奈川大学大学院工学研究科博士前期課程)、野地保広(同前掲)が参加した。6)註2『富士紡績百年史』および、『小山町史』による。7)昭和七年八月拾参日、『小山町史第五巻近現代資料編II』(平成7年、小山町史編さん委員会、小山町)に収録。8)註2に同じ。9)部屋名は、小山町都市整備課提供の移築当初の様相を示すと判断される図面に書き入れられたものによる。この名称は、豊裏の部屋名などとも一致する。10)小山町都市整備課保管。徳富蘇峰=1863~1957、近代日本を代表する言論人のひとり、豊門会館に蘇峰による額あり。李王垠=1897~1970、朝鮮王朝高宗国王の第7王子・李垠。11)碑文に、「和田君遺惠碑、桂五十郎撰、喜多貞吉書、正三位勲一等子爵澁澤榮一篆額」「大正十四年十二月、静岡県駿東郡小山町民建之」とあり、豊治の小山町に貢献した功績を称えて、小山町民によって大正14年に建設されたもので、撰文は漢学者桂湖村(1868~1937)、書は大学者喜多貞吉、篆額は澁澤榮一。註1の『和田豊治伝』に「規模の結構、装置の考案は美術界の大家朝倉文夫」とあり、デザインは朝倉文夫(1883~1964)である。12)三木作次郎編輯、1925。13)註1に同じ。14)1837~1884。幕府の儒者の家に生まれ、明治維新後は新聞条例や讒謗律を批判したことで知られる。現地には、墨田区教育委員会による「成島柳北の住居跡」の説明板が立てられている。しかし、豊治の自邸であったことについては触れていない。15)『明治前期・昭和初期 東京都市地図1 東京東部』(柏書房、1995)収録。16)『墨田の地図その二』(墨田区立緑図書館・1987年、原本は大正元年「本所区地籍地図」東京市区調査会)収録。17)註1に同じ。18)国指定史跡。19)碑側面に六橋杉溪言長書とあり。1865~1944年。20)1865~1950年。21)明治期の医者、ジャーナリスト、教育者。22)展示解説によると、建物は文政9年(1826)の建築。23)註1に同じ。24)豊門会館の園内には、その他、西洋館・噴水泉・正門などの建造物があり、整備敷地内を構成する重要な存在である。これらについては期を改めて報告する。

* 1 平戸市教育委員会 技師・工博

* 2 神奈川大学 教授・工博

Research Engineer, The Hirado City of Education, Dr.Eng.

Prof., Faculty of Engineering, Kanagawa Univ., Dr.Eng.